

Title	『「老水夫」のモラルと「千一夜物語」の寓喩』
Sub Title	The moral of the Ancient Mariner and an allegory in The Arabian Nights
Author	由良, 君美(Yura, Kimiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1960
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.10, (1960. 6) ,p.59- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00100001-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『老水夫』のモラルと「千一夜物語」の寓喩

由良君美

一

Intentional Fallacy という言葉があります。世上に喧ましい「新批評」が大切にする用語であります。それによれば、ある作品を批評する場合、作者自身の意向をいくら参考にしたところで、別にその作品の意味が明らかになるものではないから、作者の意向の研究によって作品を論ずることは誤りである、という考えであります。^(註1)これは、結局おしつめてゆくと、作品をその作者からも・その時代環境からも抽象すること、——要するに作品をそれだけで自立したものと捉え、不純物は残らず切り棄てて論じようとする態度に通じかねないため、文学を歴史として純客観的に扱おうとする歴史学派を中心とする人々との間に猛烈な衝突をきたしたこ^(註2)とは、周知のとおりであります。たしかに、ある論者の言うように、「詩は作者自身のものでなければ批評家のもでもない……詩は読者公衆のものである」^(註3)にちがいありません。ですから、もともと作者がどういう意向を抱いて書いたにせよ、一旦、作者の手を放れたならば、その作品が秀れた客観性と表現力をそなえたものである限り、作者の意向などどうでもよく、かえってそういう予備知識

は自由な鑑賞の妨げになると言えましよう。また、作者が創作中に自覚していなかったような意味や意義が、読者の眼をまっけて始めて発見され、作者自身が感謝を以てそれを承認した事実さえ、史上に決して稀れてはならないのであります。メルヴィルの「白鯨」を読んだホーソンが、そのなかに幾多の秘められた意味を読み取り、メルヴィルへ送った手紙のなかで早速それを知らせてやったところが、当のメルヴィルはその事を別に自覚もせずに創作していたため、先輩への尊敬の念もあって、謙虚にも、ホーソン先生の指摘を得て、これらの暗黙の意味はたちどころに『作全体に内在する重要な寓意要素』となつて本来あるべき場所を得ましたと答えたことは有名であります。もちろん逆の場合も多々あります。途方もない誤読をされて、裁判にかかった本もある。ですから、ひとくちに読者と言つても、その質はさまざまであります。批評家と名のるほどの読者は、すべからず、歴史学派の人々の倦まぬ文献研究はすべて消化した人、しかも感受性のみずみずしさを維持して、ふたつながら、言語体験の支えとして読書に活用しうる人を要求しなければ困るわけです。ですから、批評と歴史は互いに敵視すべきものだという考えはどうも幼ない気がしてなりません。「芸術作品のもつ意味は、その意向によつて尽しうるものではなく、作者の意向に等しいものでもない」という考えには、誰も反対の余地はありません。ただ「尽しうるものではなく」・「等しいものではない」ことの承認が、直ちに「意向を参考にする必要は、全然ない」ということには決してならないことが、とかく忘れられがちです。ハリー・レヴィンが鋭い揶揄をこめて言つたように、新批評の技術化は、不当な等式過剰を生みだし、いたるところに「デアル耽溺症」(critic's addiction to copula)の氾濫がみられます。新批評の方法論の立てかたが既にそうなる傾向を含んでいる以上、当然のなりゆきです。しかし、たとえ「等しく」なく、従つて copula で等式化できないまでも、幾分なりと等しいものに接近する道程として有用なものなら、あらゆる根拠を活用することを忘れては困ります。すべてをイークォルで割り切り連結することはなるべく避け、暗喩と事実との間の関係や差異のさまざまの程度をひとつひとつ認識する廻り道の方を、もっと大事にしてゆきたいものです。いくら歴史に通曉したところで「過去の観点に実際に立つこと」^(註7)はできるわけがないのは確かにしても、時代や個人の特有の約束や癖を度外視してしまえば、一種の文法無視をすべての面に冒して何も読めなくなるのと同様に、作者の「癖」とおなじくらしいの意味での作品の「意向」も頭の隅に入れてから物を読んだ方が良い場合が多いようです。作品の象徴性の「度合は、美的考察ばかりが決定することではなく、史的考察によつても、決定されるものであろう。」^(註8)という意見に、わたくしも賛成

したいのであります。

二

コールリッジの傑作「老水夫」*The Rime of the Ancient Mariner* という詩には、そもそも「教訓」や「モラル」が含まれているのか、その点、作者の「意向」はどうなのか。これは、この詩が世に問われて以来、問題にされてきた事柄であります。作品を論ずる場合に、作者の「意向」を考慮に入れることは、どの程度本当に「誤り」なのか？ ひとつのテスト・ケースになりうるかも知れないと考え、「老水夫」を取りあげて、この詩と意向の関係について私見をのべることに致します。

「老水夫」のモラルをこの詩の教訓的部分にありとする読み方は、最も単純なものの一つであります。

He prayeth well, who loveth well

Both man and bird and beast.

He prayeth best, who loveth best

All things both great and small;

For the dear God who loveth us,

He made and loveth all. (612—617)

「人間も鳥も獣もすべて／よく愛する者こそよく祈る者。大きいものも小さいものもすべて／最も良く愛する者こそ最もよく祈る者。／われらを受したまう神は／万物を造り愛したまうゆえ。」

ひとくちにいえば、これは「博愛の詠」にはかならず、これを以てこの詩のモラルとすることは、余りにも「キリスト教矯風会」的

であることはいうまでもありません。われわれは当然ティリヤードとともに、「動物愛護という分りきった当世風の考え」^(註9)にこの詩のモラルを狭めることは「警戒」すべきでありましょう。

この考えの対極にたつものとして、この詩のモラルなどは単なる付けたりで、むしろこの詩の秀れた超自然・超現実的な幻想領域の構築力にこそ感動すべきであるという現代の審美主義的な受け取り方があります。矯風会的モラル解釈に始まり幻想的没モラル解釈までに及ぶ広汎な感動の幅を孕むほど、たしかにこの詩は現代的な意味でも「多義」^(註10)であります。だからこそ、「新批評」の実践上の最高峯の一つとして誰もが一致して推すR・P・ウォレンの「老水夫」論^(註10)のような、興味深い複合的解釈も成り立ったのであります。この詩の「恐るべき複合性」^(註11)を觀念史に傾斜したエクスプリカション方式で解こうと試みるティリヤードも、「新批評」ではありませんが、方角はある程度おなじであり、C・M・パウラの自由鑑賞的な読み方もそうであります。その少し前に溯ると、J・L・ロウズはこの詩を「純粹の想像力の所産」と解しながらも、日常経験の真実に深く触れるところのある「応報」のメカニズムに、この詩のモラルを讀んでおります。フォーセットはコールリッジの個人的アレゴリーを強調したことがあります^(註12)。ボドキン^(註13)は復活の神話原型の表われとして読みました^(註15)。そして今日では、上記のティリヤード、パウラ、ウォレン、およびハウスは、^(註16)皆、この詩が何らかの意味の真剣なモラルを含むことを認めますが、彼らは一様に詩のモラルの範圍をいたずらに限定すまいとして非常に細心の態度を取っており、この点に批評の現代性を眺めることができます。

三

ところで、コールリッジの同時代人の考えはどうだったか。ワーズワスを含む多くの人がこの詩を不快に思ったことは周知のとおりであるなかに、ラムはワーズワスに対して、この詩を絶賛し、「奇蹟的な事柄を語る部分は皆、嫌いだが、この詩に描かれたような光景の作用の下にある人間の気持は、トム・バイバーの魔法の笛のように、私の心を曳^(註17)つた」といっているのがみられます。ラムは、この「奇蹟」という言葉で生まの教訓臭も含めていたのかも知れませんが、彼の読み方は現代的な新らしさをもっているといえます。

よう。これと対照的なのが、悪名の高いパーボールド夫人の非難であります。彼女によれば、「この詩にはモラルがないし、この詩はありそうにない話だ」そうであります。コールリッジは、この才媛の非難を余程気にしていたらしく、再々この言葉を引合いにだして来たようであります。コールリッジのいう所では、彼はこの非難に答え、「ありそうにない話ということについては若干、疑問があるう」が、モラルがないというのは見当ちがいで、「自分はありすぎると考えている。」だいたい「このような純粹の想像力の所産の第一原因としてモラルがこんなに大びらに」顔をだしている点こそ、この詩の唯一の、また主要な欠陥なのだ、と返事したとのべております。またこの詩のモラルを説明して、具体的にいえば、「千一夜物語の商人と魔神の話」より以上のものを持ってはならなかったのだ、といっております。パーボールド夫人の批評が、いかにつまらない俗論であるにせよ、この批評をきっかけとして、コールリッジの側の「意向」が幾分なりとあらわれることになったことは、われわれの見逃すことのできない点であります。

四

ところで、パーボールド夫人というのはどういう人か？ コールリッジはどういう意味で夫人に対してこのような返答をしたのだろうか？ Mrs. Anna Letitia Barbauld (1743-1825) は当時、詩人兼雑文家として通っていた才媛であり、月評家としても有力な存在であったようです。コールリッジは一七九七年の夏にプリストルで夫人と始めて会ったようであり、この人物を相当たかく買っていた様子が見えます。一七九八年三月九日の手紙には「あの偉大な秀れた女性パーボールド夫人」という言葉が見当り、一七九八年十月三日の手紙にはロンドンで彼女を訪問したことが記されており、一八〇〇年三月一日の手紙には「これまで二・三回パーボールド夫妻に会っている——一度はその自宅で——が、実に立派な人たちだ」と言い、それに「追信」として「会えば会うほど彼女を尊敬する——あの素晴らしい精神的節度 (that wonderful Propriety of Mind) ——非常な鋭敏さを備えていながら……それでいて、その鋭さを実に着実に実践、『理性』の域内に留めているのだ。(傍点は筆者) 妬ましくらいの尊敬をもっている。」とあります。チェインパーズもこのなかの言葉を「コールリッジ伝」に引用し、(註20)文字どおりコールリッジの尊敬の意味にとっているようです。(註21)
(註22)

しかし、カント哲学の用語を使ったこの文面は、わたくしには幾らかの戯れが感ぜられます。コールリッジはここで、自己省察の看に夫人の性格を使っているというのが本当のところ、自分の「精緻さ」が時としてんでもない「脱線をやりがちなこと」を、夫人の実際的な手堅さと対比して呑気に嘆いたに過ぎないことが、この手紙を読み通すと感ぜられます。一目を置きながらも、自分と相反する心情の持主である彼女に軽い違和感を感じていたのでしょう。この違和感がやがて表面化して来ます。一八〇六年十月九日の妻への手紙になると、夫人の名の綴りをわざわざ Mrs. Barbauld とふざけて書かずにはいられない程の心境の転移が起っております。その二年前の一八〇四年一月二五日に、親友サウジーに向って、「バーポールド夫人が書いたラム批評の方も読んだところだ。俺は公然と名乗りをあげて、あんな女、心臓まで一刀両断にしてやる。でなかったら、二度と俺を信用せんでよろしい。」と凄んでおります。親友ラムが酷評されたのに憤然としての筆であります。知りあって七年後には、すでにここまで評価を下げる気になっていることは見落せません。これにはコールリッジの私怨もないように見られます。ジョン・フレアとの対話録をみると今日コールリッジの名訳と謳われるシラー原作の「ワレンシュタイン」出版の頃にたまたま話が及び、コールリッジは「バーポールド夫人が私の訳……を批評し、遮二無二罵倒しまくった」ので、とうとう丸で売れなくなり「屑屋に払下げになった事情は申し上げるまでもありません」(註27)と酒脱な返事をしている。夫人の書評は時に不必要に辛辣であつたらしく、サウジー、ラム、コールリッジは等しく被害者であり、経済学者マルサスもその例外ではなかつたのであります。

クラープ・ロビンソンは夫人について記録を残している一人ですが、彼によると夫人は「この国の長老派教会女流会員の亀鑑」(註28)であつたのであります。夫人が今日たまたま記憶されているとすれば、それは児童文学への貢献においてであり、詩人としても批評家としてもその名はもはや残っておりません。一八世紀末から一九世紀初頭にかけて児童文学はひとつの復興期を持ったのですが、バーポールド夫人はその立役者の一人であります。この児童文学復興の波は又、「お説教や道德物語の驚くべき流入でもあつた」のであり、就中バーポールド夫人の作品は「何らかの爲になる教訓」(註29)を必ず含んでいたと伝えられております。一八〇二年に当時六歳になつたコールリッジの息子ハートレーに本を選んでやつたラムはコールリッジ宛ての手紙のなかで、「バーポールド夫人の一派が童謡の古い古典を一切適切追放してしまつた。」本屋には児童古典はなくなり、代りにどこでも「バ夫人だのトゥマ夫人だの愚にもつかない代物

が山積(註30)されている」と長嘆息しております。夫人の教訓好きは、現代のアザール教授の口をかりれば、「第一話でもう結構」といいたい程、「おそるべき婦人」(註31)という他はない性質のものとされております。その人物の口から「モラルがない」と言われたのですから、コールリッジの応戦がどういう意味合いを持たざるを得なかったか、ほぼ想像がつこうというものです。「長老派教会」の鑑であり、「矯風会的モラルを愛好し児童文学にまで教訓を持ちこまずにいられた人。書評となつては辛辣を極めることで有名な人。実践理性の域外に出ない手堅い着実な性格の故にコールリッジが違和感を持たされた人。最初の尊敬が次第に困惑に化していった相手。——これらを念頭にしながら、一八三〇年という晩年になつても、なお甥にこの顛末を述懐せざるを得ないコールリッジの語調に耳を傾けてみましょう。

五

『バーボールド夫人は、かつて私に言ったものだ。彼女は「老水夫」を非常に嘆賞するものだが、次の二つの欠陥は替めるわけにゆかない、と。——この詩はありそうもない話だということ・この詩にはモラルがないということ、がそれだ。ありそうという点については、若干疑問の余地があることは認める。だがモラルがないということについては、私の考文ではありすぎると思われる、と私は彼女に答えてやったものだ。しかも、私から言うのも何だが、この詩の唯一の・主要な欠陥は、このような純粹の想像力の所産の原理・動因として、道徳感情が公然と読者の上に姿を現わす点にこそあるのだ、と。この詩は「千一夜物語」のなかの例の話より以上のモラルを持つてはならなかったのだ。それは、ある商人が井戸の端で腰を下してなつめを食べ、その核まねを飛ばしたところが、何と、魔神が現われて、わしはこの商人を殺さねばならぬ、なぜなら核の一つが当って魔神の息子の眼を潰してしまつたのだ、と言つたという話だ。』(コールリッジ「茶話」一八三〇年五月卅一日)

Mrs. Barbauld once told me that she admired *The Ancient Mariner* very much, but that there were two faults in it—it was improbable, and had no moral. As for the probability, I owned that that might admit some question;

but as to want of a moral, I told her that in my own judgement the poem had too much; and that the only, or chief fault, if I might say so, was the obtrusion of the moral sentiment so openly on the reader as a principle or cause of action in a work of such pure imagination. It ought to have had no more moral than the *Arabian Nights'* tale of the merchant's sitting down to eat dates by the side of a well, and throwing the shells aside, and lo! a genie starts up, and says he *must* kill the aforesaid merchant, because one of the date shells had, it seems, put out the eye of the genie's son." (TABLE TALK, May 31, 1830)

(註28)

このコールリッジの釈明をどう解釈したらよいか、興味深い問題であります。それに入るまえに、実作品の上に批評に対するコールリッジの反省の痕がどのように見えるかを調べておきたいと考えます。

六

「老水夫」は「抒情民謡集」初版に収められた一七九八年の初稿に始まり、一八〇〇年の再版の稿本を経て、「シビルの書」に収められた一八一七年の三稿に至る、大体三つの重要な改作過程を経て現行のものとなっていることは周知のとおりであり、(註33) 我国でもこれに関する加納秀夫教授の緻密な研究がみられます。(註34) 同教授はそのなかで、一七九八年版と一八一七年版の相異として(1)全行数の縮小、(2)アーケイズムの消失、(3)リアリスティックな描写の増加、を挙げておられ、更に一八〇〇年版だけに見られながら一八〇二年版から削られている冒頭の「梗概」に触れ、そのなかに「明示され」た「この詩の中核ともいうべき倫理性の手がかり」を正しく指摘しておられます。これは重要な着目であり、詳しく言うと、一八〇〇年版「梗概」には「残酷にも博愛の掟を無視し」という倫理が新しく加えられており、一七九八年版「梗概」の「奇怪なことども」という言葉が「多くの異様な審判に追われたこと」という、これ又ひとつの倫理を含む表現に代わっていることでもあります。大体、教授の要約された三つの相異からして、初稿を「リアル」に「モダン」にしようとする作者の意向の表われなのであって、「梗概」の件は、これに「道徳」の裏打ちをしようとする意向の表われと取って差支

えないのですから、計四つの相異点は、——教授の結論される「幻想性」も勿論ながら——「荒唐無稽」というサウジーに代表される見解を容れて「リアル」なものに近づけること…「イメージヤリが少々凝り倒れてである」^(註34)というワーズワズ評を容れて「縮めたり」「モダナイズ」したこと…「モラルがない」というバーボールド夫人に答えて「梗概」で「道徳」の裏付けをしたこと…などの批評Ⅱ応答の因果を含んだ現象として理解されるのです。ワーズワズは他にもう一つ鋭い指摘を加えており、この詩のなかの「もろもろの出来事には相互の必然的な結び付きがない」^(註35)と申しました。これに答えるかのように、コールリッジは一八一七年版の冒頭にバーネットの「哲學的尚古学」からの引用文をモットーとしてかかげた上、更に独得の「欄外註」を付け、詩の本文の内容を欄外で散文的に要約し、筋や意図の相互聯関を辿りやすいようにしたのであります。バーネットのモットーが「老水夫」のモラルのメカニズムを暗示する含みを持つていることはウォレンが巧みに指摘したところであります。^(註36)全部で五十八箇所にのぼるこれらの「欄外註」は、それだけでコールリッジの書いた最良の散文とまでいう人があるほど、引き締った素晴らしい文章ですが、この「欄外註」によって、詩の本文だけでは「相互の必然的な結び付きがない」と思われる諸事件も、実は作者の脳裡では明快な筋道を持っていたことが、多少牽強附会なほどはつきりさせられております。たとえば 279 / 383 行の、風なしに動く船の動力となっていた水中の「孤独の精」の役割が、詩の本文だけでは握めず、必然性がないように見える所を、実は「天使の群」の命令系統の下に行動していることが「欄外註」によって了解されることなどは著しいものであります。その他、さまざまの「悪霊」や「極霊」や「主護聖者」の役割などもこの例に洩れません。しかし、何といっても「欄外註」全体を貫く性格は、詩のなかのモラルの縦糸を明確にすることにあります。老水夫の殺鳥行為は、「無慈悲にも吉兆の神の鳥を殺し」たと示され、海蛇も「神の創りたまいしものども」と説明された他、「聖母のめぐみ」とか「守護聖者の祈願」とか、「罪ほろぼし」とか、「懺悔」とか「万物にたいする愛情と敬虔」といった宗教的な用語の使用によって、本文にみられないモラルが強く介入しております。三段階にわたる本文改訂といい、一八〇〇年の「梗概」といい又この「欄外註」といい、モットーといい、要するに、多くの批評を謙虚にうけ入れながらの意識的な推敲であります。なかでも最も一貫している態度は、本文の大綱を原型にとどめながら、その範囲内でモラルをもっと浮彫りにしようとする姿勢であると言っても、あながち言い過ぎではありません。こう見てくると、「モラルがない」と正面切って攻撃した張本人がバーボールド夫人であり、その夫人に対して彼が第4節で考察し

ておいたような「一目置きながらの違和感」を抱いて一種の闘志を燃やし、一八三〇年になってもまだ甥に述懐するほど、この攻撃にこだわりを持っていたことに思い及ぶならば、パーボールド夫人こそは「老水夫」を現在みるような決定稿にまで彫琢させるに最も力あったそもその原因であり、影の存在でもあったのだと推測したい気が致します。

七

さて、こういう事情を背景にして言われたコールリッジの先きの言葉——「老水夫」のモラルは「千一夜物語」の「商人と魔神」の話より以上のモラルを持ってはならなかった——の真意はどこにあるかを考えてみましょう。この話はシェヘラザードが語る第一話にでて参ります。コールリッジが幼時、「千一夜物語」を耽読して想像力を培ったことは有名であります。当時はレイン訳もパートン訳も無論なく、極めて粗忽な仏訳を種本とした重訳の省略版しかなかったわけですから、コールリッジがこの原話をどの程度知っていたか全く推測が付きません。現にコールリッジが口にする限りでも「なつめ、の核」が魔神の子の「眼を潰した」となっているのに、パートン訳では「胸に刺って殺された」となっています。^(註38)原話では、すんでの所で魔神に殺される所まできて、商人が命乞いをし、一年の猶予期間をもらい、その期限の切れた日に再び現場に来、偶然に居合せた三人の老人の助力で、遂に命が助かる次第になっております。もしも「商人と魔神」の原話全体を念頭においてコールリッジがあつたのだと憶測すれば、「老水夫」との間には次のような近接点があります。ほとんど死ぬ所まで体験しながら辛くも助かった人物であることが、老水夫も商人の場合も同じであること…老水夫が婚礼式の客に自分の不思議な過去を語って教訓することは、三人の老人がそれぞれ自分の異常な過去を語ることによつて魔神と商人を教訓することと併行すること…「老水夫」では信天翁が「人間の食物を食べ」る人間に近い異形の者として象徴されているが、三人の老人はそれぞれに羚羊や犬や牝驢馬をつれており、それが皆、もともと人間が変身したものだと言明されており、ある老人はそれを人間と知りつつ殺さざるを得なかった因果の苦悩を経て、どちらの場合も、広義の博愛の掟を動物変形の寓意を底に潜ませながら物語っていること…などであります。細かく見れば、更に幾らも類似が見いだされます。一例を挙げれば、

「老水夫」31行の「婚礼の客は胸を叩き」という言葉など、これは「千一夜物語」に沢山見出される特有の愁嘆の形容辞であり、「商人と魔神」にも「一同は歎き悲しみ、自分たちの胸を叩き」という箇所があることを考えておくのは無駄とはいえせん。しかし、以上は偶然ともいえるもので、私がコールリッジの持ちだしたこの寓喩の決定的な鍵と見たのは、むしろ原話の中にはなく、コールリッジの言及そのもののなかにあるのです。それは、「茶話」のなかで編者自身が故意にイタリックにしている二つの語、*must* と *because* であります。「茶話」のこの文章は、多くの人が全文を引用して考察の対象にしました。近くはウォレンもハウスも全文を引いております。しかし、どういふものか、この二つの語がどうしてイタリックにされる程の意味合いのものであるかについては注意を払っていないのです。「茶話」として語られたものを甥が筆記したものですから、どこまで事実を真実に伝えているかは疑問の余地がありますが、イタリックされている以上、その言葉はコールリッジが特に印象に残るほど強調して喋ったに違いないと見るのが自然であります。「*must, because*——「殺さねばならぬ、なぜなら。」「かくかくのことを冒した以上、罰せねばならぬ。」これは掟の立場法の立場であり、道徳の形式主義の立場であります。「*must, because*」の論理をめぐって、コールリッジの脳裡に動いた推理は次のようなものではなかつたらうか。——老水夫は別に石弓で信天翁を射る必要はなかつたし、商人もなつめの核を飛ばす必要はなかつた。ただ退屈や煩わしさが、結果を深く考慮することなく、そのような行為に走らせた。本人の気持では悪気があつたのではない。*innocent* にやつた迄のことである。しかし、本人にとっては偶然のこの行為も客観的には大きな犯罪を結果した。自然界や法の論理は「*must, because*」である。それに従つて当然の罪に問われなければならない。だから教訓童話の大家であるパーボールド夫人が作れば、ここで老水夫は罰せられて終る所であらう。所がそうならなかつたので、夫人はこの詩にモラルがないと不足を言う。だが、勸善懲惡思想の骨子をなす「した以上、ねばならぬ」の論理が、果して人間のモラルとして高度のものであらうか。そうではなからう。老水夫に射殺された信天翁は「自分を射殺した男」のことを復讐せずにかえて「愛した」^(註39)その信天翁のことを「愛した」「極霊」が、代つて老水夫に復讐を指摘したために老水夫はしばらく苦難に会うが、結局、「天使や守護聖者」のとりなして一命だけは助かる。魔神は三人の老人から、犬も羚羊も騾馬も業を含んだ人間の變身であると聞き、眼には眼を以て報いることを止め、商人の一命を助け、パーボールド夫人はこれを没モラルだとおっしゃるが、それは夫人の偏狭なユニテリアンの思想からきてるといえないか。応報

のモラルよりも一次元高い愛のモラルを「老水夫」に書いたのであり、それは何も難解なものではなく、「千一夜物語」の二挿話さえもそれを含んでいる底そこの、一見他愛なく幻想的でさえあるモラルにすぎない。これは自分のように奔放すぎる思考のゆえに「たえず脱線する」者の方がかえって見やすい真理であり、「実践理性の埒内」に固く身を持す女流道学者の思考にはかえってどうやら見逃がされやすい真理であるに見える。——コールリッジが「千一夜物語」の寓喩を引いて甥に語った言葉には、円熟した詩人の以上のような洒落た含みが *'must, because'* のイタリックの周辺に籠められていると考えられまいか。ハウス教授はこの「商人と魔神」の物語からモラルを引きだそうと苦心惨胆した末、商人が助かったのは猶予期間と約束を正しく守ったことの報いと考える他はない。従ってこの物語のモラルは「運命の気まぐれも人間の名誉心と善良さで克服しようということ」であろう、などと述べておりますが、これではどんなに無理をしても「老水夫」に当てはまらないモラルになってしまいます。そんな歪曲をするまでもなく、隠された鍵にはコールリッジがちゃんとイタリックするように配慮して呉れてあったのではないのでしょうか。

右の解釈は、ただの思い付きではありません。「老水夫」を創作した前後から晩年にかけてのコールリッジの思想的立場の推移を追ってみると、この解釈の傍証がますます増えてくるからであります。もはや紙面がありませんので簡単にのべますが、コールリッジは当時、ゴドウィン思想とハートレー思想という二つの徹底した必然論 *necessitarianism* (註1) の体系の捕虜となっていた時代から、新しい有機体理論に脱けだそうとしていた時期にいました。宗教的にもユニテリアンの立場を脱脚して幾分汎神論的色彩の正統キリスト教に移ろうとしておりました。「老水夫」を思想史のアレゴリーとして読めば、必然論は「死んだ自然」を結果せざるを得ないこと、「生きた自然」はその必然論を脱して、ロマン的な自発性を獲得した所にあること…を物語る詩として読むことさえもできるものです。必然論のロジックは、例の *'must, because'* の論理に他なりません。それを否定し、それを超えるロジックとしてコールリッジは愛の論理である「和解」を掴むに至っていたわけです。この彼個人の思想史的背景に照してみると、先きの私の解釈にも内容がついて来るように思われますが、それは後日を期することとし、「老水夫」のモラルと「千一夜物語」の寓喩の一つの *intentional* な読みを提出し、これが果してどの程度の *fallacy* を持っているかについて、大方の御批判を待つて筆を置くことに致します。

——
[April 18, 1960]

(註1) William Elton, *A Guide to the New Criticism*, Modern Poetry Association, 1953, pp. 24—5. この問題の最も秀れた論者として W. K. Wimsatt & Beardsley, *The Intentional Fallacy* (Wimsatt, *The Verbal Icon*, Kentucky U. P., 1954, pp. 3—18. 所収) が挙げられる。

(註2) なかでも R. S. Crane の「リマンヌ・ブルマックスと批評一元論の破産」(一九四八)は痛烈を極めたものであり、歴史学派の巨匠の至業と云ふべきであろう。R. S. Crane (ed.), *Critics & Criticism: Ancient & Modern*, Univ. of Chicago Press, 1952, pp. 83—107. 又 *Critical Momism of Cleanth Brooks* 又改題して所収。

(註3) W. K. Wimsatt, *The Verbal Icon*, Univ. of Kentucky, 1954, p. 5.

(註4) Luther S. Mansfield & Howard P. Vincent (ed.) *Moby-Dick or, The Whale* by H. Melville, Hendricks House, 1952, pp. 575—577. Cf. W. Y. Tyndall, *The Literary Symbol*, Columbia Univ., 1953, p. 13.

(註5) René Wellek, Austin Warren, *Theory of Literature*, Harcourt, 1948. 太田三郎訳「文学の理論」筑摩書房、1954, p. 43.

(註6) Harry Levin, *Symbolism & Fiction*, Univ. of Virginia, 1956, p. 10.

(註7) Wellek, Warren, *Op. cit.*, p. 44.

(註8) Harry Levin, *Op. cit.*, p. 18.

(註9) E. M. W. Tillyard, *Five Poems 1470—1870*, Chatto & Windus, 1948, p. 67.

(註10) R. P. Warren, *The Rime of the Ancient Mariner: A Poem of Pure Imagination: An Experiment in Reading*, Reynal & Hitchcock, 1946. は John Calder による奇抜な挿画によって、この詩のシンボルを把握しやすくなっている。

ウォレンのこの論文は極めて企图的なものであり、ウォレンの詩人的洞察と広汎な資料操作が見事に一致した業績として、いわゆる「新批評」の枠をおのすから破る豊富な含意を持つている。ウォレンの論の要旨は、この詩のテーマを

(1) 第一テーマ「罪—罰—宥和」⇨スクラメントのヴィジョンのテーマ⇨One Life のテーマ。

(2) 第二テーマ「想像力」のテーマ。この(1)と(2)は最後に象徴的に融合される。

(3) 個人的テーマ、「ロールリッジの種々の内面的葛藤」の三つのテーマに分解し、(2)に「光」の象徴の解釈を中心とする詳細な技法分析を加えている辺りが、圧巻である。W. H. Auden のロマン思考の卓抜な研究 *The Enchanted Flood or The Romantic Iconography of the Sea*, Faber, 1951. の「老水夫」の象徴解釈に因する限り、ウォレンに全面的に依存して

らるゝが思はれる。なほ、このウヰョンの論文は、挿画を省略し、註の大部分を本文に繰り込み、可成りの改訂を加えた形
よび、R.P. Warren, *Selected Essays*, Random House, 1958. に再び収められてゐる。

- (註 11) E. M. W. Tillyard. *Op. cit.*, p. 86.
- (註 12) C. M. Bowra, *The Romantic Imagination*, Cambridge, 1951, pp. 51—75.
- (註 13) J. L. Lowes, *The Road to Xanadu*, Constable, 1927, pp. 293—4.
- (註 14) H. I. Anson Fausset, S. T. Coleridge, Jonathan Cape, 1934, p. 166.
- (註 15) Maud Bodkin, *Archeypal Patterns in Poetry*, Oxford, 1951³, pp. 26—88.
- (註 16) Humphrey House, *Coleridge*, Rupert Hart-Davis, 1953, pp. 84—113.
- (註 17) Charles Lamb's letter to W. Wordsworth. January 30, 1801. Alfred Ainger, (ed.), *The Letters of Charles Lamb*,
Macmillan, 1888, 1, p. 164.
- (註 18) E. L. Griggs (ed.), *Collected Letters of S. T. Coleridge*, Oxford, 1956, 1, p. 201, p. 197. © B. Flower 宛書簡 (April
1, 1796) のば、ニーキーマンと夫人の文書と Robert Hall 宛書簡とがこれである。
- (註 19) E. L. Griggs, *Op. cit.*, p. 393.
- (註 20) E. L. Griggs, *Op. cit.*, p. 420.
- (註 21) E. L. Griggs, *Op. cit.*, p. 575.
- (註 22) E. L. Griggs, *Op. cit.*, p. 578.
- (註 23) E. K. Chambers, S. T. Coleridge: *A Biographical Study*, Oxford, 1950², p. 128.
- (註 24) E. L. Griggs, *Op. cit.*, p. 578.
- (註 25) E. L. Griggs, *Op. cit.*, 11, p. 1191.
- (註 26) E. L. Griggs, *Op. cit.*, 11, p. 1039.
- (註 27) R. W. Armour & R. F. Howes (ed.), *Coleridge the Talker*, Cornell, 1940, p. 217.
- (註 28) Quoted by R. P. Warren, *Op. cit.*, p. 61.
- (註 29) Eleanor A. Towie, *A Poet's Children: Hartley & Sara Coleridge*, Methuen, 1912, pp. 174—5.
- (註 30) Charles Lamb's letter to Coleridge, October 23, 1802. Alfred Ainger, *Op. cit.*, 1, p. 189.

- (註31) Paul Hazard, *Les Livres, les Enfants et les Hommes*, 1932. 邦訳矢崎源九郎・横山正矢訳「本・子ども・大人」紀伊
国屋書店、一九五七、五四頁。
- (註32) C. Patmore (note), *The Table Talk & Omniana of S. T. Coleridge*, Oxford, 1917, pp. 106—107. なお T. M. Rayser
(ed.), *Coleridge's Miscellaneous Criticism*, Cambridge, 1936, p. 405. 以下見ればなるべし。
- (註33) マンリントン・ゴッデン、E. H. Coleridge (ed.) *The Complete Poetical Works of S. T. Coleridge*, Oxford, 1912, pp.
186—209. 又は F. W. Schulze (ed.), *W. Wordsworth-S. T. Coleridge: Lyrical Ballads* (1798) *Historisch-kritisch*
herausgegeben mit Einleitung u. Anmerkungen, Max Niemeyer, 1952, ss. 31—63. が厳密である。なお、この機会
に一言するが Schulze のこの版は日本人である我々にとって極めて有益なテキストであり、ドイツ文献学の名譽を耻か
めないものと考ええる。その点、主として書誌的な見地から加えられた Ernest Bernbaum の註評は正鵠を得たものでは
ない。Bernbaum は、(1) 英語を外国語とする研究者の特有の見地を理解していない。(2) 第二次大戦勃発以後の英語文献入
手困難が抗戦国におつて如何に甚だしいものであったかを、少しも知っていない。この二点は我々の痛切な同情を惹き起す
に充分である。Cf. *The Journal of English & Germanic Philology*, vol. LII, No. 2, April 1953, pp. 266—267.
- (註34) 加納秀夫「イギリス浪漫派詩人」研究社、一九五一。「The Ancient Mariner の幻想性」に於て、三八—六八頁。
- (註35) W.'s note to 1800 Ed. Cf. Schulze, *Op. cit.*, p. 64n.
- (註36) Warren, *Op. cit.*, p. 87. *Selected Essays*, pp. 233—4.
- (註37) 大場正史訳「全訳千一夜物語」ハートン版、角川文庫、一九六〇、第一巻、「ハートンの序文」七一—七九頁。
- (註38) 大場訳、七〇頁。なお House は「核」でなく「石」として居る (House, *Op. cit.*, p. 90) が、これはライオン版によつた
たゞのこと。Cf. E. W. Lane (tr.), *Arabian Nights' Entertainment*, Chatto, 1912, I, p. 38.
- (註39) Cf. *Ancient Mariner*, ll. 402—405. The spirit who bideth by himself/In the land of mist and snow./He loved the
bird that loved the man/Who shot him with his bow.
- (註40) House, *Op. cit.*, p. 91.
- (註41) Necessitarian (—ism) とは、S. F. Gingerich, *Essays in the Romantic Poets*, Macmillan, 1924, pp. 17—87. 及び
A. O. Lovejoy, *Coleridge & Kant's Two Worlds*, (*Essays in the History of Ideas*, G. Braziller, 1955, pp. 254—276.
新取) の所論が重要である。

(註 42)

Newton P. Stallknecht, *Strange Seas of Thought*, Indiana U. P., 1958. 所収の『The Moral of the Ancient Mariner』は、この意味で、哲学の見地からのアンローチの好個の見本である。Foxie N. Fairchild, *The Romantic Quest*, Columbia U. P., 1931, pp. 332—350. の「老水夫」考察も思想的背景に立つもので「必然論」の役割を良く論じている。Rudolf Lutz, S. T. Coleridge, *Seine Dichtung als Ausdruck ethischen Bewusstseins*, Francke, 1951, ss. 51—78. は Heidegger の立場からする議論で異色があるが、往々にして噴飯物のロジックが見られ、首をかしげやるを得ない。これに比し、G. Wilson Knight, *The Starlit Dome*, Methuen, 1959, pp. 84—90. は深い直観的解釈として、示唆する所多大である。

〔付記Ⅰ〕 なお本稿脱稿後、次の新著が到着した。「新批評」に反対するフレッットの立場の実証として四つの作品解釈を展開した意欲的研究で、「老水夫」論を含んでいる。

R. L. Brett, *Reason & Imagination, A Study of Form & Meaning in Four Poems* Oxford, 1960.

〔付記Ⅱ〕 本論文の骨子は、四章を簡略化し、七章後半を増補した上で、三つの比喩のレヴェルをこの詩の中に認めようという主旨の下に改めてまとめ直され、第32回日本英文学会大会（神戸市立外国語大学、昭和35年5月28日）で発表されることを、付記したい。